

## 報 告

# アダム・スミス『国富論』のcapital個別資本の 観点とstock社会的総資本の観点

佐藤 公俊<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 長岡工業高等専門学校名誉教授 (Professor Emeritus, National Institute of Technology, Nagaoka College)

On the two viewpoints of individual capital and social integrated stock in *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* by Adam Smith

Kimitoshi SATOH<sup>1</sup>

### 要旨

本稿は、社会経済と商品経済の関係を捉える経済学の議論の流れを検討する研究の一環である。資本主義社会が先行して発展した18世紀-19世紀のヨーロッパにおいて社会経済や商品経済の実践的把握や学問的研究が行われた。社会経済についての研究であるpolitical economyのイギリスにおける代表的な著作に、18世紀後半、政策と経済を論ずるJ.スチュアートの政策論的な『経済学原理』*An inquiry into the principles of political economy*やアダム・スミスの『国富論』*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, および、少し時代が下ったの19世紀における、主に商品経済ないし市場経済を理論的に研究するD.リカードの『経済学および課税の原理』*On the principles of political economy and taxation*, J.S.ミルの『経済学原理』*Principles of political economy* などがある。

本稿では、アダム・スミスの経済研究についての先行研究者の議論を取り上げ、個別資本 (capital) の観点と社会的総資本 (stock) の観点との関連と導入を検討する。

**Key Words :** Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Individual capital, Social integrated stock

### 1. はじめに

アダム・スミスは、『国富論』 (*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*) において、諸国民の富 (Wealth of Nations) を増大させるための方法を研究している。スミスのこの目的に沿った議論の流れは、マクロの視点での政策論とその帰結の展開で、政府が自由放任政策により農業・産業資本の自律性を確保し資本蓄積を促進することによって、資本が形成した剰余を投資して資本化し、労働者を雇用することで生産的労働者を増加させ、

増加した生産的労働により富が増産されて、一国の富が増大するという連関である。そこからの政策的結論は、一国の富の増大をもたらす方策が、自律的な資本蓄積を促進させて生産的労働の雇用を増大させる自由放任的政策にあることである。スミスの政策と社会経済についての研究の特徴は商業社会を設定して論ずるように、まず、社会全体を捉えるマクロの視点が設定されるということができる。

本稿の課題は、一国の富総体と総資本を対象としたスミスのマクロ的研究の流れの中で、資本蓄積の主体として個別資本 capital が導入された動機と背景、

および、stock として見た総資本と個別資本との理論的関係の検討である。『国富論』第1編の商業社会論の展開における「転形問題」の出発点となる社会設定は社会全体を捉えるマクロの視点から展開されている点にも注目したい。

さて、『国富論』第1篇でスミスは、社会の富総体と総資本を対象としてマクロ的視点の物的資本資財 (stock) から分析するが、それに加えて、第2編で、スミスは、生産的労働を用いる主因として個別資本 (capital) を導入し、資本の各種用途への使用 (投資) による生産的労働の雇用の増加を論じて、ミクロの視点から個別資本を導入したと言えるのである。

本稿では、まず、『国富論』における第1編の物的資本資財 (stock) 中心の商業社会に、第2編の個別資本 (capital) が導入された背景についての議論を検討し、第2編のスミスの個別資本 (capital) 導入の契機や動機を探る。また、第1編の初期未開社会からの商業社会の発展における投下労働と支配労働の一致から乖離への変化という、L.ミークのいわゆる「転形問題」における個別資本 (capital) と社会的総資本財 (stock) とのミクロとマクロの理論的連関も注目されるべきである。

こうした理論的関連を検討する際前提として確認しておくべきことは、個別資本 (capital) と社会的総資本財 (stock) とが相異なることである。各個別資本が1年に回転する際の資本に充当される総要素集合 (人・もの・金・組織・情報) の固定・流動資本部分と年間の利益額との価値と、個別資本の形成した社会的総商品量の価値とは相違するのである。つまり、全ての個別資本の価値を構成する要素の内の使用価値集合には期間内に形成された総商品量が含まれるのであるから、総資本の労働や組織や技術などの要素の総構成量と資本の形成した総商品量は異なるのである。個別資本の価値の集合は社会総体の富：必需品と便宜品の総体と異なる。なぜなら個別資本は「必需品と便宜品」と同じ使用価値集合だけでなく、意思決定・資金・労働力・組織・技術知識・社会的関係の組み合わせられた仕組みであるからである。個別資本の集合は、使用価値集合だけでなく、人間の集合であり、意思決定・資金・労働力・組織・技術知識・社会的関係の組み合わせられた仕組みの集合である。この集合は政府関係・家族関係・地域関係など社会関係と関係し、経済関係だけに閉じていないのである。

以下では、こうした観点から、『国富論』の中での社会の富総体の規定と個別資本規定との理論的関

係がどうであって、個別資本的視点がどう導入されたか、スミスの理論のフランス経済学からの学說的継承関係に注目し、近年の学説史研究を検討して、その特徴を把握する。

論点として、まず、『国富論』の第1篇におけるスミスの研究意図を確認する。ついで、『国富論』の背景のスミスとケネーとの関係、第2編についてのスミスとテュルゴーの関係に注目する。第2編におけるスミスとテュルゴーの関係について中川辰洋氏の議論を検討する。最後に『国富論』第1篇の背景となるスミスとケネーとの関係について、藤塚知義氏とロンドン・ミークの議論を検討する。そこには、労働価値説の投下労働と支配労働との一致と乖離とを示す社会設定で「転形問題」の出発点を見て取ることができる。

こうしたことの検討から、社会の富総体と個別資本との関係を理論的にどう捉えるか、また、広くいえば、社会経済とそれを組織・編成してゆく商品・貨幣・資本からなる商品経済との関係を理論的にどう捉えるかを展望する。

## 2. 『国富論』におけるスミスの研究意図と社会的観点

『国富論』の「序論および本書の構想」でスミスは、以下のように研究意図を説明する。

- ・「国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便宜品のすべてを本来的に供給する源」<sup>1)</sup>
- ・必需品と便宜品は、「労働の直接の生産物であるか、またはその生産物によって他の国民から購入したもの」<sup>1)</sup>
- ・「この生産物またはそれで購入されるものの、これを消費するはずの人々の数に対して占める割合が大きいか小さいかに応じて、国民が必要とするすべての必需品と便宜品が十分に供給されるかどうかが決まる」<sup>1)</sup>
- ・「この割合は、どの国民の場合も、次の二つの事情によって左右される」<sup>1)</sup>
- ・「第一は、国民の労働が普通に行われるさいの熟練、技能、判断力の程度如何」<sup>1)</sup>
- ・「第二は、有用な労働に従事する人々の数と、そのような労働に従事しない人々の数との割合」<sup>1)</sup>
- ・「国民に対する年々の供給が豊かであるか乏しいかは…二つの事情に依存する」<sup>1)</sup>

・この「供給が豊かであるか乏しいかは…後者より前者のほうにいつそう多く依存している」<sup>1)</sup>

・第1篇の主題は「労働の生産力のこうした改善の原因と、労働の生産物が社会の様々な階級や境遇の人々のあいだに自然に分配される秩序」<sup>1)</sup>である。

・「第二篇は、資本ストックの性質と、それがどんなふうに蓄積されていくのか、またその用途の違いに応じて動員される労働の量がどう違うか、を取り扱う」<sup>1)</sup>

・どんな国民でも、「同じ状態がつづく間は、有用な労働に年々従事する人々の数と、そういう労働に従事しない人々の数との割合によって、年々の供給が豊かであるか乏しいかが左右される」<sup>1)</sup>「有用で生産的な労働者の数は…どこにおいても、彼らを就業させるために用いられる資本ストックの量に比例し、また資本ストックが用いられる場合の特定の方法に比例する」<sup>1)</sup>

スミスの述べていることは以下のものであろう。農業の労働と、それだけでなく商工業の労働が生活の必需品と便宜品を供給する源であり、必需品と便宜品は直接の生産物か、その生産物により他国民から購入したものである。他の条件が同じならば、この生産物と購入品と消費者数との割合の大小で必需品と便宜品が十分に供給されるかどうかが決まる。社会の生産物と購入品と消費者数との割合は、（他の条件が同じならば、労働者数一定として）労働の生産性と生産的有用労働従事者と非生産的有用労働従事者との割合とによって左右される。必需品と便宜品の供給の程度は（他の条件が同じならば、労働者数一定として）、労働の生産性と生産的有用労働従事者と非生産的有用労働従事者との割合による。必需品と便宜品の供給の程度は（他の条件が同じならば、労働者数一定として）、経験的には労働の生産性による方が多いと、スミスは判断している。

『国富論』第1篇の主題は社会を対象として、「労働の生産力のこうした改善の原因と、労働の生産物が社会の様々な階級や境遇の人々のあいだに自然に分配される秩序」<sup>1)</sup>である。個別資本 **capital** が導入される「第二篇は、資本ストックの性質と、それがどんなふうに蓄積されていくのか、またその用途の違いに応じて動員される労働の量がどう違うか、を取り扱う」<sup>1)</sup>。「同じ状態がつづく間は」有用な労働に年々従事する人々の数と、そういう労働に従事しない人々の数との割合によって供給が左右される。有用で生産的な労働者の数は資本ストックの量に比例する。また、有用で生産的な労働者の数は資

本ストックが用いられる特定の方法に比例する。

以上のように、『国富論』第1篇のスミスのマクロ的社会観は、分業の導入による生産力の上昇を分析した上で、農工生産物を増大するため、農業と工業に向けられる生産的労働の比率を高めることである。スミスは社会的剰余について、ケネーの重農主義による農業での形成を転換して農工での形成へ向かう。ここで農業と工業に向けられる生産的労働を増大させるためには、資本（キャピタル）の農工業への投資を増加させることで、雇用する資本（ストック）の蓄積をはかることが必要と考えられている。スミスは、市場の自立性だけでなく、政策方針としても自然的秩序の形成を重視し、資本家に自由に活動させて、自律的な資本蓄積と投資を進行させることを主張していると思われ、そうであれば政策は自然的秩序の形成の放任策の主張へ向かうのである。

スミスの『国富論』の経済研究では、まず、商業社会のように社会経済について社会全体を捉えるマクロ的視点が設定されるということが出来る。スミスによると、『国富論』第1篇の主題は「労働の生産力のこうした改善の原因と、労働の生産物が社会の様々な階級や境遇の人々のあいだに自然に分配される秩序」<sup>1)</sup>であって、それは社会を対象とする視点である。また、第2篇は、「資本ストックの性質と、それがどんなふうに蓄積されていくのか、またその用途の違いに応じて動員される労働の量がどう違うか、を取り扱う」<sup>1)</sup>のであって、個別資本的視点が導入されている。

こうした視点の差異は、中公文庫版『国富論』Iの翻訳者による注（1）では、スミスの **capital**, **stock**, **capital stock**の用語法として以下のように解釈されて区別されることから裏付けられる。同注では、社会総体の資本財を見るマクロの視点と個別資本を見るミクロの視点との第2編における共存が言われていると言える。すなわち、「第二編などの一部においては、**capital**は、貨幣の形をとる資本、**stock**は、原料、食料、機械設備など現物のかたちをとる資本、すなわち資本的資財として、やや意識的に区別されている場合もある。」、同時に、「**capital**は生産的労働を働かせて利潤を生むものという意味に使われている。」「**capital stock**は、生産的労働を働かせる資本的資財という語感がとくに強い。」<sup>1)</sup>のである。

用語法については、以下のようにまとめることができ、**capital** は個別資本を示し、**stock** や **capital stock** の資本資財は、個別資本の資本資財だけでなく、社会的総商品＝総資本資財にも拡張できると思われる。

- capital : 貨幣的資本, 生産的労働を働かせて利潤を生むもの
- stock : 現物資本, 資本資財
- capital stock : 生産的労働を働かせる資本的資財

### 3. スミスとテュルゴーの関係

#### 3. 1 スミスとテュルゴーの出会いと継承

2で述べたように, アダム・スミスは『国富論』第2編で「資本ストックの性質と, それがどんなふうに蓄積されていくのか, またその用途の違いに応じて動員される労働の量がどう違うか, を取り扱う」。スミスは, 生産的労働を用いる主体として個別資本 (capital) を導入し, 資本の用途への使用 (投資) による生産的労働の雇用の増加を論じて, ミクロの個別主体の視点を導入したと言える。その第2篇の形成に先行する経済学はどう影響したのか。

この問題について, 中川辰洋氏は著書の『テュルゴーとアダム・スミス』において, スミスが独自に資本概念を発達させたという日本の学界の通説と異なり, 欧米の最近の学説を背景に, スミスがヨーロッパ大陸旅行中にフランスのアンヌ＝ロベール＝ジャック・テュルゴーとパリで出会って意気投合し, 帰国後テュルゴーの『富の形成と分配に関する諸省察』 (『諸省察』) における資本理論を受け継いで『国富論』を完成させ, イギリス古典派を開始したと主張する。中川氏は, スミスが『諸省察』を読んだ証拠として, テュルゴーの『諸省察』前半77節までが掲載された, フィジオクラート派の機関誌『市民日誌』がスミスの蔵書にあること, および, 『諸省察』後半についても, スミスの資本理論の『諸省察』との近似性から, スミスが『諸省察』全体を読んだ可能性をあげるのである<sup>2)</sup>。

中川氏は, アダム・スミスとテュルゴーとの著作の符合と異動, および交流の謎を解明することでスミスがテュルゴーの資本理論を受け入れて第2篇を完成させたことを明らかにして, スミスの『国富論』で古典派経済学が成立し, スミスが古典派経済学の始祖となったという通説にチャレンジする。すなわち, テュルゴー資本理論の一部を継承したスミスがそれを元に『国富論』を完成し, そこでイギリス古典派経済学が成立し, スミスがイギリスの古典派経済学の始祖となったと主張するのである。

#### 3. 2 『国富論』と『諸省察』との類似点

中川氏はオランダの経済学説研究者ホイングの間

題提起をあげて『国富論』と『諸省察』との類似点を指摘する。

中川氏は, ホイングが「『国富論』のなかに『諸省察』の段落と酷似する記述があるのは, スミスがテュルゴーの著作から当該部分を引用したからにはほかならない。そのことはまた, スミスの初の経済書となる『国富論』がテュルゴーの『諸省察』から強い影響を受けたというだけでなく, スミスがテュルゴーの経済学説をかなりの程度まで受け入れたことを示すものである<sup>2)</sup>として, 「スミスがテュルゴーの経済学説をかなりの程度まで受け入れた」という。

ホイングのあげた14項目の「『国富論』および『諸省察』の語句 (用語) の相似性」について, 「付表 『国富論』および『諸省察』の語句 (用語) の相似性<sup>2)</sup>」をあげて, 中川氏はこう述べる。「後半の7番目からこちらは, テュルゴーにあつては『諸省察』のエッセンスとも言える商業社会の新しい富の概念『資本 (capital)』や『資本家 (capitaliste)』たちの織りなす『富の形成 (生産) と分配 (交換)』を論じた第29節以降の議論—具体的には投資, 資本の形成と使途 (用途), 貨幣と利子との関係などである。これをいま一度スミスの『国富論』に即していい換えるなら, 第2篇『資本 (ストック) の性質, 蓄積, 用途について』に収録された数々のメニューに相当する<sup>2)</sup>のである。

ホイング説の評価について, 中川氏は, 「ホイングのいわゆる『奇妙な符合』とは, つまるところ, テュルゴーのスミスへの影響の跡にほかならない<sup>2)</sup>としている。

#### 3. 3 テュルゴーとスミスにおける重商主義とフィジオクラシーの影響

中川氏は, マーシャル研究の大家グレーネヴェーゲンからの批判, 「テュルゴーのスミスへの影響の跡」と把握することへの彼の批判を検討する。グレーネヴェーゲンは, 「奇妙な符合」は「テュルゴーのスミスへの影響」というような大それた代物などでなく, むしろ彼らが同じ時代に同じ空気を吸って育った結果であり, とりわけ重商主義とフィジオクラシー (またはフィジオクラート派) はふたりの偉大な経済学者にとっての『共通の先行者』としてかれらの思想形成に多大な影響を及ぼした<sup>2)</sup>と反論するのである。

中川氏は, ホイングも, 重商主義とフィジオクラシー (またはフィジオクラート派) はテュルゴーとスミスにとってのグレーネヴェーゲンの言うように

「共通の先行者」と考えていると言う。しかし、ホイニングは、重商主義は学派ではなく、「重商主義の主張は経済理論ではなく、国家の行う経済政策を正当化する政治的思想であり、17世紀後半このかた主要にはイギリス、フランスでさまざまな政治思想や政策のテキストが発表されてきた」<sup>2)</sup>、グルネー、ペティ、チャイルド、タッカーも重商主義者と言われることがあるので、経済学派の区別では無いという。中川氏はさらに、カンティヨン、ロー、スチュアートも重商主義者と言われることがあるという。フィジオクラート派は「フランソア・ケネーを開祖とする『農業王国』の建設を主張する政策集団」<sup>2)</sup>である。これらの論者のうちテュルゴーとスミスの「共通の先行者」は、ロー、カンティヨン、ケネーである<sup>2)</sup>。

テュルゴーとケネー、フィジオクラート派との関係について、中川氏は、テュルゴーはケネーの「純生産物」を採用するが、ケネーと違い農業以外の分野に「純生産物」の発生を認めていて、「純生産物の一般化」を規定する点で、テュルゴーは「自らはフィジオクラート派と一線を劃していた」<sup>2)</sup>であると言う。

一方、スミスはカンティヨンを高く評価していたと中川氏は言う。スミスの理論内容では、「長期的均衡価格を意味する『自然価格』、価格変動と社会的資源配分との関係についてもカンティヨンの内在価値の影響の跡を認めることができる」<sup>2)</sup>からである。

スミスは、ケネーを「土地の生産物が『すべての国の収入の源泉』と説く『農業システム』の学説（ケネーの学説）は誤りである」と批判するが、「自然法秩序の主張には共感」<sup>2)</sup>していた。そして、スミスは後年「人間の経済的営みはすべて『見えざる手』によって支配され社会に均衡をもたらすものと説いた」<sup>2)</sup>のである。

経済学説史研究者のハチソンは、「テュルゴーの『諸省察』にみられる資本概念、資本の形成と蓄積、貯蓄性向と投資との関係、資本の用途などの原型ないしアイデアについては、カンティヨンなり、ケネーなりの作品」には見当たらないという。「サー・ジェイムズ・スチュアートの名著『経済学諸原理』のなかにさえ見当たらない」<sup>2)</sup>のである。「これらの問題をふたたび取り上げたのは…『国富論』を著したアダム・スミスそのひとであった」<sup>2)</sup>のである。ブリュワーは、資本理論の「チャイルド-グルネー-テュルゴーの理論的系譜」が成立すると説く<sup>2)</sup>。

中川氏は、ハチソン説とブリュワー説を評価して「テュルゴーの『諸省察』はそうした先人たち[チャイルドやグルネー]の学説を精緻化することで誕生したと…そのような解釈がもし成立するとすればスミスの『国富論』における資本の形成と蓄積、貯蓄と投資などの理論研究がテュルゴー学説に着想を得て形成された」<sup>2)</sup>と解釈できるといい、それには応分の説得力があるとして所説を主張する。

中川氏は、ホイニングの『テュルゴーとアダム・スミス』を手掛かりに、『諸省察』と「『国富論』の『符合』と『異同』」、そしてそのインプリケーションを検討」<sup>2)</sup>して、結論的に以下のことを述べる。

「今日ではスミスがテュルゴーの経済学説や経済思想に多大の影響を受けたのみならず、『国富論』の執筆にさいして『諸省察』から着想を受けたことは欧米の研究者の多くの受けいれるところ」<sup>2)</sup>であり、ホイニングのいう「『諸省察』と『国富論』との間の16箇所に及ぶ記述上の相似ないし符合はその結果」である<sup>2)</sup>。二人の「1766年にパリでの邂逅からこちら、途絶えることのない交流」<sup>2)</sup>は、「これを裏づける二人の直接取り交わした書簡類を目にすることは当面叶わないにせよ、彼らの知人・友人の証言や二人の蔵書目録にみる著書の献本や資料提供の跡からある程度うかがい知ることができる」<sup>2)</sup>。

他方で、スミス学説の独創性や優越性を説くためのグレーネヴェーゲンの反論は次のようであった。

『諸省察』と『国富論』の類似は、「テュルゴーなりスミスなりが当時の学問や思想の影響の跡であって、テュルゴーからスミスへの影響という大仰なものでは断じてない。そもそも、ふたりが1766年に出会ったと言っても、それは偶然のなせる業であって…ふたりがのちのちまで交流を続けたという証拠がこれまで発見されたためしがない」<sup>2)</sup>ということであり、それゆえ「スミスは『国富論』の中でテュルゴーと彼の著書『諸省察』にまったく言及していない」というのである。しかし、中川氏によれば、近年関係資料の研究が進んで明らかにされた間接的な証拠から判断すると、グレーネヴェーゲンの反論の成立には難があるのである。

### 3. 4 スミス『国富論』がテュルゴーの『諸省察』から取り入れた資本理論

中川氏によると、『国富論』第2編第3章の資本理論が『富の形成と分配にかんする諸省察』第100節の利潤を再投資する「自己金融型貯蓄投資モデル」に対応することから、スミスはテュルゴー資本理論の「自己金融型貯蓄投資モデル」を継承したに過ぎ

ないので、テュルゴー資本理論に及ばないのである。なぜならば、テュルゴーは『諸省察』などで、他人の資金を導入し投資する「外部金融型貯蓄・投資モデル」と、自己資金を再投資する「自己金融型貯蓄投資モデル」との資本理論を構築して、フランスの古典派経済学の理論的基礎を形成したからである。

『諸省察』などによりテュルゴーは、欧米の研究者から「古典経済学の先駆者」、「古典経済学の創始者」、「資本主義の理論家」と称されるのである<sup>2)</sup>。

中川氏はテュルゴーの『諸省察』第86節を引いて「資本の使途」論に注目する。

「農業、製造業、商業における資本 (capital) の使途は、前貸し資本(capital avance)のほか、多くの勤勉と労働(industrie et labour)必要とするので」、「農業、製造業、商業に用いられた貨幣は、…これと同額の貨幣の貸付から生じる利子よりも多くの利潤をもたらすであろう」。この利潤によって「企業者は年々歳々自らの手にする資本 (capital) …の利子〔に相当する額〕のほか、彼の勤勉、労働、資質、リスクを償い、それにまた企業者がすでに負担している前貸の年ごとの償却分 (deperissement annuel des avance) を支弁する利潤を確保しなければならないのである」。テュルゴーはここで、貨幣資本を所有する企業者の「資本の使途」として、貨幣資本を投下して資本 (固定・流動資本) を整え、「彼の勤勉、労働、資質、リスク」を投入し、資本活動の成果の収入から、流動前貸し資本と固定的「前貸の年ごとの償却分」を差し引き、「同額の貨幣の貸付から生じる利子」より多い「利潤」、「利子」と「勤勉、労働、資質、リスク」を賄う「利潤」を獲得すると述べていると断言している。さらに、こうした第86節の「資本の使途」論について、中川氏は「商品や貨幣などの種々の形態をとって姿態変換を経過しつつ運動するものとして再生産的把握」の視点があるという。氏はマルクスの姿態変換を経過しつつ運動するという資本規定を満たすものとして、テュルゴーの資本論を解釈できると考えていると思われる<sup>2)</sup>。

中川氏はテュルゴーの資本利潤の考え方の優位性をこういう。テュルゴーは「利潤の源泉を『生産的労働のエンプロイメント』と狭く規定せず、企業者の『勤勉、労働、資質、リスク』などを償うものとしている。そしてそれはまた農業や製造業ばかりか商業を含むあらゆる産業部門に共通していえることである。…テュルゴーのほうがスミスよりも『はるかに論理的体系的になっている』とするのが正しい判断というべき」である<sup>2)</sup>とテュルゴーの資本利潤

の考え方の優位性を指摘している。

中川氏のテュルゴーの資本利潤の考え方の指摘から考えると、テュルゴーはここで、貨幣資本を所有する企業者の「資本の使途」として、貨幣資本を何らかの部に投下して前貸し資本 (固定・流動資本) を整え、「彼の勤勉、労働、資質、リスク」を投入し、企業活動の成果の収入から、流動前貸し資本部分と固定的「前貸の年ごとの償却分」を差し引き、「同額の貨幣の貸付から生じる利子」より多い「利潤」、つまり、「利子」と「勤勉、労働、資質、リスク」を賄う「利潤」を獲得することを意味していると解することができる。それはスミスより「はるかに論理的体系的になっている」と断言している。

かくして、スミスは、『国富論』冒頭からのケネー由来の社会的剰余を生産するストック総資本論の展開から、第2篇でテュルゴーの利潤を追求するキャピタル個別資本論を導入したと解することができるのである。

ミクロの個別資本の観点をスミスがテュルゴーから継承したとすれば、その前提となるマクロの観点をスミスがケネーとの関係でどう把握したかを見よう。

#### 4. スミスとケネーの資本理論についてのミック説

中川氏が主張するように、英仏の古典派経済学の成立において、テュルゴーの個別的資本概念の継承に基づいて、スミスの『国富論』第2編の資本理論の成立があるとして、次に、ケネーやフィジオクラシーの農業労働による剰余を伴う社会的総資本概念とスミスがどう関係するかの問題がある。また、スミスにおけるミクロ的なテュルゴーの資本理論の継承とマクロ的なケネーの経済表などの影響の理論的關係はどう捉えたら良いであろうか。『国富論』におけるケネーとスミスの社会的総資本の観点的関係について有力な説として、ミックの説や藤塚和義氏の説がある。中川氏は、この問題について、藤塚和義氏の説を検討して批判している。

イギリスの経済学説史研究の大家のロンドン・ミックは、ケネーとスミスの同様な「いかなる方法で富は生産され増加されるか」と言う両者の「基本的な経済問題」が、ケネーの「純生産物 (プロデュイ・ネット)」とスミスの「剰余(サープラス)」と示される、社会的剰余とその考察であるとして、次

のようという。

「ケネーにとって、スミス同様、基本的な経済問題は、国富の性質と原因にかんする問題であった…富を形成するのは何か、いかなる方法で富は生産され増加されるか。また、わけても富の増加率を極大化するためには、いかなる手段がとられなければならないか。ケネーもスミスもこうかんがえた、年生産物が、それが直接生じる人々により最初にうけとられるとき『自然に分れる』ところの二部分を、明瞭に区分けすることからはじめることなしに、こうした疑問に答えることはできない、と。生産物（またはその価値）の一部分は、現に完了した期間中生産過程で物理的に使い果たされた品目を、回復ないし補償するために使用されなければならない。第二の部分、すなわちリカードウのいわゆる『絶対に必要な生産上の支出』をこえる剰余は、右の期間の労働にもとづく純社会的収益をあらわす。この剰余は次の意味において『自由処分可能（デスポウザブル）』である、すなわち、社会の生産力を旧状に維持するにはこの剰余を支出しなくてもよいが、社会は随意にそれを『不生産的に消費』することも、社会の生産力を増大するために用いることもできる、という意味において。フランス重農主義において、生産物の第二の部分は、いうまでもなく、名高い『純生産物（プロデュイ・ネット）』として現れた。アダム・スミスとその後継者たちの体系において、それは、『純実質所得（ネット・リアル・インカム）』、『純収入（ネット・レヴェニュー）』、『可処分所得（デスポウザブル・インカム）』、あるいは単に『剰余（サープラス）』として、さまざまにあらわれた。」<sup>3)</sup>

ミークは、「資本の諸形態に関する重農主義者の分析は、たしかに、経済思想にたいするかれらの貢献の、最も意義あるものの一つであった」と述べて、個別資本についての「重農主義者の分析」を評価する。つまり、社会総体の富のうちの社会的剰余と資本との関係については、ミークは、国富を増加する社会的剰余からの新資本の適用先を、ケネーが「資本主義的〔生産〕方法を農業」だけに限ったことは「かたよった…接近方法」であったとする。それが次のように、テュルゴーらが、「資本主義的〔生産〕方法を農業とおなじく製造業へ適用する」ことで、「訂正された」と言う。それは、「デュ・ポン Du Pont, ボードー Baudeau およびテュルゴー Turgot が、資本主義的〔生産〕方法を農業とおなじく製造

業へ適用すること」として「識別」できると述べている。この点についてミークは、フランスの重農学派での「資本の諸形態」の分析の登場をこういう。

「資本の諸形態に関する重農主義者の分析は、たしかに、経済思想にたいするかれらの貢献の、最も意義あるものの一つであった。ケネー自身は、何よりも資本主義的〔生産〕方法の農業への適用に関心をよせたのであった、だがしかし、かたよったこの接近方法は、ケネーとミラボー Mirabeau が創設した重農学派が、グルネー Gournay の創設にかかるという『姉妹学派』と合併すると、一あるいは後者に併合されると一やがて、訂正された。ケネーの体系から封建的装飾を取り払うについてもっぱら責任のあった、デュ・ポン Du Pont, ボードー Baudeau およびテュルゴー Turgot が、資本主義的〔生産〕方法を農業とおなじく製造業へ適用することをつよく要求しはじめると、重農主義の本質は、識別するにより容易となった。」<sup>3)</sup>

スミスの社会総体の富の増進を分析する「資本主義的生産」（資本家的生産）の「科学的分析」の観点は、ミークが言うように、スミスとケネーとが社会的剰余をもって、国富を増加する新資本のありうべき唯一の源泉とみなした点で共通するのである。

「ケネーとスミスの両者は、また彼らが代表する両学派は、本来、資本主義的生産の科学的分析にたずさわったのである。両者は、資本主義的〔生産〕方法の拡大をつうじて国富を増加することに興味をいただき、内外商業の自由がその必要な前提であることを了解した。その理論的分析において、ともにかれらは、社会的剰余一かれらはそれをもって新資本のありうべき唯一の源泉とみなした一の源泉と処理の問題に、多大の注意を集中していった。」<sup>3)</sup>

このように社会的剰余をもって、国富を増加する新資本のありうべき唯一の源泉とみなす、「資本主義的生産の科学的分析」の観点をミークは「古典主義」と言う。ミークはケネーとスミスの両者の「理論の型」の属する「骨ぐみ」を「古典主義」の名称を与えることで、両者を同格に扱うことを提案している。すなわち、彼は、両者を「目的と概念のほぼ似かよった骨ぐみの内部で働いているもの、とみな」<sup>3)</sup>して、そして、「この骨ぐみに最も便利な名称は、おそらく『古典主義』 Classicism であろう。」<sup>3)</sup>また、「重農主義、およびスミスとかれの後継者たちが提

出した理論の型は、古典主義という属の二つの異種とみなすことを提案するのである<sup>3)</sup>。

こうして、ミークはケネーとスミスの両者の「理論の型」の属する「骨ぐみ」を「古典主義」とし、そのもとで、ケネーとスミスとを同格に扱うのである。しかしながら、全くの同格と断言していいかどうか、継承関係を検討する必要がある。

## 5. 藤塚説：スミスのフィジオクラシー批判

藤塚知義氏の『アダム・スミスの資本理論 古典経済学の成立と経済学クラブの展開』の中のケネーとスミスの関係の議論をまとめる。

藤塚氏は、スミスの第1篇から第2編への理論上の「視角の大きな転換」の要因を問題にする。氏は、「われわれは、『講義』、および『草稿』の段階のスミスから『国富論』のスミスへの発展の中に、古典派労働価値論の形成史の完成を、そして投下労働価値説と支配労働価値説との二重視点の成立の過程を、見ることができ、かつこの成立を可能にしたのは、独立生産者を生産主体とする視点から、資本主義的生産をモデルとする視点への、転換であったと考えることができるのである<sup>4)</sup>」と言い、「この視角の転換が、スミスの考え方の中で、いかにして可能であったのか、という問題」に到達する。つまり、「『講義』『草稿』の時代である一七六〇年代から、『国富論』の形成された一七七〇年代にいたる」期間に、「スミスの理論の上にこの視角の大きな転換をもたらした、いわば回転の軸となったのは、何であったか」という問題である<sup>4)</sup>。

藤塚氏は、「この期間に横たわる一七六四年から六六年に至るスミスの渡仏とその間におけるフランスのフィジオクラートとの接触という事実と、一七六七年のスチュアートの『経済学原理』の刊行という事情とが、スミスの考え方の中に、上述のような転換をもたらすべく何らかの影響を与えた<sup>4)</sup>」のではないかと、問題を提起する。

藤塚氏は、スミスの理解するフィジオクラートの見解を述べて、スミスのフィジオクラシー批判を視角の展開の要因とする。

スミスのフィジオクラートの理解はこうである。

「利潤と賃金との現実的内容は、生活資料(サブシステンス)(生活必需品である農業品)として、把握されていることになる。したがって工匠・製造業者の生産する製造品は、労働力の再生産(労働者の生活資料の再生産)には預からないわけである<sup>4)</sup>。

スミスのフィジオクラシー批判をこう示す。「この学説(システム)の主たる誤謬は、工匠・製造業者・および商人の階級を、全く不生産的だとしている点にあると思われる<sup>4)</sup>。この「工匠・製造業者・および商人の階級を、全く不生産的だ」ということが誤謬であり、それらが「生産的」である根拠は5点ある。それらは、「第一にこの階級はそれ自身の年々の消費物の価値を年々再生産し、少なくともこれを維持し雇用する資本の存在を継続させるもの」であること、第二に「工匠・製造業者・商人を召使と同一視するのは全く不当と思われること(彼らの労働は彼らの賃金や生活資料の価値を回収し得るような販売し得べき商品に自己を固定し実現するものであって、召使の労働とは異なる)」<sup>4)</sup>、「第三に工匠・製造業者・商人の労働が社会の実質的富を増加」しうると考えられること、「第四に農業者や農業労働者といえども節約をせずには真実の収入・彼らの社会の土地および労働の年々の生産物・を増加することができない点で、工匠・製造業者・商人と異なるものではないこと」<sup>4)</sup>、「第五に、各国の住民の収入は専ら彼らの勤労によって得られる生活資料(subsistence)の量による」というフィジオクラートの「仮定によるとしても商業=製造業国の収入は、商業トレードあるいは製造業をもたない国よりはるかに大きいに違いないということ」である<sup>4)</sup>。

藤塚氏は、スミスが「土地に使用される労働のみが生産的労働であるとする点でこの学説システムの説く諸見解はあまりに狭隘である<sup>4)</sup>」と批判するが、「フィジオクラートの富の把握について」は高く評価しており、スミスは「諸国民の富は貨幣という消費し得ない富ではなくて、その社会の労働によって年々再生産される消費物に存するとしていること、また完全な自由こそ、この年々の再生産を最大にするための唯一の有効な方策であるとしていることにおいて、この学説の教義は、…正当であると思われる<sup>4)</sup>」という。

藤塚氏によると、ケネーなどのフィジオクラート批判からスミス独自の商業社会論ができるのである。フィジオクラートの「生産階級と不生産階級を区別しかつ富を再生産において把握するというその考え方はおそらくスミスに強烈な印象をあたえたに違いないが、同時に彼らが工匠・製造業者を以って不生産的とするその理論は、甚だしく奇妙なものに思えたに違いない。したがって当然これをいかに批判するかということが、スミスの頭を支配したのであろう。そしてこのことが逆に彼をして、これにたいする批判を通じて、新しい視点に到達せしめたと言っ



て良い」<sup>4)</sup>のである。

藤塚氏によると、フィジオクラシーを把握して、その批判をすることからスミス独自の商業社会論ができたのである。

藤塚氏は「『国富論』第2編に展開されるスミスの考え方」の形成を次のように「地主の収入からの支出という要因の代わりに、ストックの使い方すなわち資本(キャピタル)としての使用(資本蓄積)・をおきかえるとき、『国富論』第二編の構想に到達する道が開かれる」としてまとめる。「生活資料を生産する生産階級とこれを生産しない不生産階級、というフィジオクラートの把握を転換させて、生活必需品及便益品〔＝労働力の再生産の資財〕を生産する生産的労働と、これを生産せずたんなるサービスを提供するに過ぎない不生産的労働、という把握に発展させ、かつ再生産に起動力を与えるものとして、フィジオクラシーの把握における地主の収入からの支出という要因の代わりに、ストックの使い方すなわち資本(キャピタル)としての使用(資本蓄積)・をおきかえるとき、『国富論』第二編の構想に到達する道が開かれる」<sup>4)</sup>のである。

スミスのフィジオクラシー批判と資本(キャピタル)定置について、正当な解釈と言えるが、上述の4までの議論からして、「資本(キャピタル)としての使用(資本蓄積)」がスミス独自のものであると言う把握でいいのか疑問が残る。

## 6. 中川氏の藤塚説批判

中川氏は、藤塚氏の徹底した文献探索と、藤塚氏がスミスにおけるテュルゴーの『諸省察』の資本概念の影響を認めている点を評価する。藤塚氏の“capital”の来歴の検討について、中川氏は、「藤塚知義の指摘のように“capital”が会社の簿記・会計の記帳からスタートして漸次個人や企業の経済活動、さらには『政治算術(political arithmetic)』や経済学(political economy)の領域へと拡大していくこと…は正しい」<sup>2)</sup>と評価している。

その一方で、中川氏は、藤塚氏がカンティヨンのcapitalを資本と解釈した点と、資本理論においてスミスが独自に形成したものであり、テュルゴーに勝っていると評価する点を詳細に批判する。『国富論』における「資本概念の生成と成立」についての藤塚氏の主張を3点に渡り批判するのである。

中川氏は、藤塚氏がカンティヨンのcapitalを資本と解釈した点をこう批判する。「藤塚は、カンティ

ヨンの『商業一般の本性に関する論説』…のなかで5箇所“capital”という用語が『資本』相当の語義で用いられていると主張する。…戸田が“capital”を『資本』と訳出したのは明らかな間違いであった。戸田の誤訳をベースとした藤塚のカンティヨン解釈はけだし間違っている」<sup>2)</sup>と批判している。中川氏によれば、藤塚氏の「5箇所」の“capital”の語義は「公債」、「貸付元本、大金などであって、『資本』相当の意味ではただの一度も登場しない」<sup>2)</sup>からである。

それに対して、資本概念の「テュルゴーの定義はスミスのそれとは異なり、あくまでも“capital”(“stock”ではない)と言う術語を用いて行われている以上、簿記・会計用語としての『“capital”』という用語の概念はテュルゴーによって最終的に書き換えられた』というほかはない。“capital”としての『資本』は一義的に『貨幣的資本』として定義されるからである」<sup>2)</sup>と中川氏は自説を述べる。

その観点から、藤塚氏のイギリスの、特にスミスの『国富論』における「資本概念の生成と成立」についての主張を3点に渡り批判する。藤塚氏はスミス説の『優位性』の根拠として①「『国富論』におけるキャピタルの把握は、単なる価値の額ではなく、商品や貨幣などの種々の形態として姿態変換を経過しつつ運動するものとして再生産的把握を意味している」こと、および、②「その核心は生産的労働のエンプロイメントにある」からである<sup>2)</sup>という。

中川氏は、藤塚氏の①について、マルクスのロジックのスミス解釈への密輸入と批判する。すなわち、①は「あきらかにマルクスのロジックの密輸入であり、マルクスから見たスミスの『資本』論といわざるをえない。」と批判し、「そもそも、スミスの『国富論』の一体どこにキャピタルが『商品や貨幣などの種々の形態として姿態変換を経過しつつ運動するもの』といった記述があるというのであろうか」<sup>2)</sup>と藤塚氏のスミス解釈を批判する。

中川氏は、藤塚氏の②について、それがマルクス主義経済学的な「生産過程至上主義」論であると批判する。「生産過程至上主義」論にあっては「搾取論」が形成される。それは、「例えば企業の利潤は『生産的労働のエンプロイメント』の果実であり、しかもそれは労働者に支払われた賃金の超過部分であるが、これこそが『剰余価値』であり、資本家ないし事業者はこれを『利潤』として自らの懐に入れる」<sup>2)</sup>というものである。中川氏は、「生産過程至上主義」論の「搾取論」をこう批判する。こうした「搾取論」では、「商人もしくは商業資本による労

働者の雇用は…『生産的労働のエンプロイメント』であり、したがってまた商業資本の利潤もまた『生産的労働のエンプロイメント』の果実と」は言えない<sup>2)</sup>という。こうした「生産過程をもたない商業資本の資本家や労働者の労働が『生産的労働のエンプロイメント』なのか、そしてその成果としての利潤が、農工業のそれと同じような性質のものなのかどうかの議論」<sup>2)</sup>を藤塚氏が「スキップしている」点を批判するのである。中川氏は、続いて、「農業、製造業そして商業の産業部門全体を見回した場合、『国富論』のほうが『生産的労働のエンプロイメントとの関係という再生産的把握の観点からいって、テュルゴーよりもはるかに論理的体系的になっている』<sup>2)</sup>といえるかどうか理解に苦しむ」<sup>2)</sup>と藤塚説に疑義を呈するのである。

## 7. 小括

直上のように『国富論』における「資本概念の生成と成立」についての藤塚氏の主張についての中川氏の批判をみてきた。中川氏が、「スミスの『国富論』の一体どこにキャピタルが『商品や貨幣などの種々の形態として姿態変換を経過しつつ運動するもの』<sup>2)</sup>といった記述がある」のかと言うように、マルクスから見たスミスの「資本」論的な藤塚氏の解釈があり、そうした解釈の批判と、「生産過程をもたない商業資本の資本家や労働者の労働が『生産的労働のエンプロイメント』なのか、そしてその成果としての利潤が、農工業のそれと同じような性質のものなのかどうかの議論」を藤塚氏が「スキップしている」点の批判、および、「農業、製造業そして商業の産業部門全体を見回した場合、『国富論』のほうが『生産的労働のエンプロイメントとの関係という再生産的把握の観点からいって、テュルゴーよりもはるかに論理的体系的になっている』<sup>2)</sup>とはいえないとの藤塚説への疑義は正当であろう。

先に見たように、スミスは『国富論』で第一編のstock（元金・物的資本）から第二編のcapital およびstock（資本）の併用に転じて、capitalを貸付貨幣資本とし、stockを物的資本の意味に変えて、資本概念を形成したのであった。その際スミスは、剰余生産に対応してstock物的資本概念を個別の経済主体の実物からstock社会的再生産の物的基礎や社会的剰余生産物に拡大して、展開したと言えるのではないか。藤塚氏の「『国富論』第2編に展開されるスミスの考え方」の形成を「地主の収入からの支出と

いう要因の代わりに、ストックの使い方すなわち資本(キャピタル)としての使用（資本蓄積）・をおきかえるとき、『国富論』第二編の構想に到達する道が開かれる」と言う見解自体は正当であると言える。しかし、中川氏がほぼ説得的に明らかにしたように、スミス『国富論』第2編の「資本(キャピタル)としての使用（資本蓄積）」はテュルゴーの『諸省察』に学んだものと、言うのが妥当ではないだろうか。

## 参考文献

- 1) アダム・スミス著、大河内一男監訳、「国富論 I」, 中央公論社, 1978.
- 2) 中川辰洋著、「テュルゴーとアダム・スミス」, 日本経済評論社, 2019.
- 3) ロンルド・ミーク著、吉田洋一訳「イギリス古典経済学」, 未来社, 1956.
- 4) 藤塚知義著、「アダム・スミスの資本理論：古典経済学の成立と経済学クラブの展開」, 日本経済評論社, 1990.

(2020. 10. 5 受付)